

特集

眼圧を評価する

序 論

富田剛司*

2018年の初頭を飾る最初の特集は「眼圧を評価する」である。昨年の6月号の特集では、緑内障の非眼圧的要素を総括したが、緑内障は何といても眼圧がその病態に深く関わっている疾患である。極論を言えば、緑内障から眼圧を除けば、緑内障のアイデンティティーそのものが無くなると言っても過言ではない。将来的には緑内障と眼圧が切り離されるような衝撃的な緑内障の病態論が展開される可能性もあるが、それはまだ先のことであろう。もちろん、高眼圧イコール緑内障ではないという認識は、正常眼圧緑内障の存在が広く認められた現在、既に一般的に共有されているところである。であるからといって、緑内障は眼圧とは関係がないとはすぐには言い切れないところもある。眼圧が十分低いのに視野障害が進行するという症例は我々が日常臨床で多く経験するところである。そのような場合、この患者は眼圧とは関係のない要素で視神経症が進行しているのではないかと考えるのは当然なところである。しかしながらここで別の観点から考えるべきことは、この患者は本当に眼圧が十分低いのか、という点である。もっと根本的なことを言えば、我々は患者の眼圧を正確に把握できているのかという点まで遡ってしまうのである。

本特集では、眼圧に関する6つの要素を取り上げ、エキスパートに解説していただいた。眼圧は

施設間、検者間、測定装置によってその数値にばらつきがある。さらには時間帯によっても異なり、体位によっても異なる。まずは、現在、どのような眼圧測定機器があるのか、その特性はどのようなものかということ、原眼科の原先生、橋本先生に解説していただいた。眼圧の日内変動要素は、緑内障進行を考えるうえで非常に大きな因子である。この点に関し、長年にわたり眼圧日内変動の解析に取り組んでこられた、日本医大の中元先生をはじめとするグループの先生方に総括していただいた。眼圧は体位によって大きく変動することは、カリフォルニア大学サンディエゴ校のLiuが行ったsleep laboの報告であらためて注目されるようになった。この点について、岐阜大の澤田先生に解説をしていただいた。緑内障は点眼をするだけでは抑制はできない。点眼をしてどれだけ眼圧が下がっているかが重要である。この点について、金沢大の杉山先生らに解説いただいた。また、緑内障の進行が眼圧とどのように関わっているかについて、東海大の坂本先生、鈴木先生に多数の治療トライアルスタディを総括してまとめていただいた。そして最後に、わかっているようになかなかわからない眼圧制御機構について、熊本大の井上先生に解説していただいた。緑内障は、非眼圧的要素にも影響される多因子疾患ではあるが、現時点では眼圧を極めてからその先を考えるべき疾患であることも再認識したいものである。

*Goji TOMITA 東邦大学医療センター大橋病院眼科